

神崎宣武氏講演記録

「日本からみたアジアのアニミズム」

皆さんこんにちは。神崎でございます。よろしくお願いいたします。

タイトルが私の場合、「日本からみたアジアのアニミズム」となっています。私からお願いしたタイトルですけれども、もしかしたらアニミズムということばは、お耳に慣れていない方もいらっしゃるかも知れません。アニミズムというのは霊的な存在に対する信仰、ということを言っております。これはタイラーというイギリス人の文化人類学者が言ったことでありまして、もちろんまだアニミズムという言葉が市民権を得てから半世紀くらいしか過ぎておりません。池内先生のおっしゃったヨーロッパ人のオリエンタリズム、そこにはないもの、珍しいもの、理解があまり及ばないもの、そういうものをヨーロッパの人達はかなり注目したわけでありまして、アニミズムもヨーロッパの人から見ると非常に不可解な信仰観、わかりにくい信仰であり、大きな意味でのオリエンタリズムの一つではないかと私は思っております。

ヨーロッパでキリスト教が成立してキリストという唯一絶対の神が存在し、それからいろいろな物語が生じるという本当の意味での宗教——宗教というのは教祖がいて教義があって、そこで一つの神を中心とした世界観が描けるということであると思いますが——、その意味からしますとヨーロッパではキリスト教文明が栄えて、人々はキリスト教が絶対的に上位の神観念がある。最上位に神観念があってそれに人間社会が連なる——それがヨーロッパの宗教観でしょう。アニミズムというのは、それとは別なんです。どこへあるかわからない無数の精霊というものを対象にしている。この精霊には上下の関係がない、人間との直接の、人間社会を規制するような決まりごとがない。ということはアニミズムというのはヨーロッパの人から見ると、宗教以前の原始信仰という意味合いで捉えられているように思います。タイラーの文章の中にもしばしば「未開社会」という表現がされています。「未開社会における原初的な信仰」、教義という神観念の組織図のようなものがないということです。未開社会を見るのには、アニミズムという非常に理解しにくい世界があるということを、ヨーロッパの文化人類学者達は半世紀くらい前から盛んに言っております。これは植民地社会における民族調査、文化人類学の調査研究の中でなお今まで続いている一つの捉え方だと思います。

そうしますと、日本はタイラーたちの言うところの未開社会の一番東の端にあるわけです。が、我々は、我々のことを未開社会だと思っていないのでありまして、今の世界でも、日本を未開社会と位置付ける人は殆ど誰もいないわけです。しかし、ことアニミズムに関しましては、日本は未開社会に入ります。世界の中でもアニミズムの相当濃厚な現象をもっている社会ということが言えます。未開社会とあえて言いませんけれども、説明上そういうことになります。日本ではいかに沢山

の精霊があるか。もちろん神道があり仏教があり、それはある時代から教義化もしておりまして、宗教的な定着もしております。しかし、日本全体ではなお、仏教、神道への帰属意識よりもアニミズムへの帰属意識が大きい。それが一番象徴されるのが「山」です。日本はどこへ行っても山が見えます。海洋文化を無視するわけではありませんが、時間の関係もありまして今日は山へ集中してお話をしようと思っております。

どこへ行っても山があります。ですから、沿岸で漁業をする人達も日和を見るのに、天気を見るのに、山を見ます。かつてレーダーとか天気予報がない時代は、山を見ることで、山の表情によって、私たちは農業も漁業も、作業日程を定めをしておりました。いろいろな暦をたてておりました。今でも環境の問題を考えると、海は山が育てるというようなことをよく言います。山から水が流れて海に至ります。しかし、日本でのその距離たるや、ヨーロッパのドナウとかアジアのメコンとか、あるいは中国の黄河とか、そういう大河を比較するまでもなく、その距離たるや非常に短い。山から流れて短い距離で海に至るということは、急峻であります。急流です。日本の川は急流でありますから、もちろん川舟というのはそれなりに発達しますが、世界に比べますと船運が日本では発達しない。これはひとえに流れが急であるからです。こういう歴史的な地形の想定が可能です。

どこでも山が見える、望めます。そうしたところで日本人は、この地理的な世界を三分して考えるようになりました。山頂部、山麓、そして山間、であります。この三つの領域を考えていきます。これは古事記の世界あたりから描かれていますが、主に私たちが確認できるのは、中世に出てくる様々な絵巻物とか絵図からです。これは一つには外来仏教の布教とともに仏教的思想を絵解きで庶民に知らせる、そういう流れの中で絵巻物というのが出てきます。あるいは掛け軸で曼荼羅というのが出てきます。その中で、私が今こういうふうになりやすく描いて、こんな単純なものではありませんが、三つの人間の住まいの領域、あるいは考え方の領域というのが出てまいります。一番これに近いのは富士山の参詣曼荼羅図です。室町時代に描かれておりまして、大体私が描いたようなこういう垂直分布の図が描かれています。

そうすると、この山頂部は浄界であります。それからここが下界であります。ここが中間です。今日本で行政上中山間地域というのがありまして、新しい言葉のように私たちは思いますし、私自身中山間地域などのことばはあまり好きではありませんが、中山間地域はつまりここです。古い絵図ではここを俗界というような描き方もしています。ですから、浄界があつて、俗界があつて下界がある、というふうにもなっています。それで私たちの住まいというのはこのあたりにあるわけです。それからこの家の周りに畑があります。我々は古代の生活というのは、とくに集落の単位ではなかなかつかみにくいんです。中世からの集落というのは、歴史でもずいぶん明らかにされておまして、大体こういう形になります。それでやがて水田が開けます。きれいにこう分かれるわけではありませんが、大体こういう形が日本の中世くらいまでさかのぼったときの典型的な集落構造だろうと考えています。

そして、このあたりにお宮さんが建つんです。お宮さんより少し下にお寺さんが建つ。ここで最近は見落としてしまうけれど大事なのは、こういう所へ祠があるということです。祠はいろいろな

所にありますけれども、これが道だとします。まず、峠に祠がある。この祠は何を祀ってありますか。峠を越えて山のかなたのまた別な集落、別な村に行きます。これは、峠の神。先ほど私が言いました、この自然世界の殆ど全てに宿っている神、これがアニミズムの対象であり、それをカミという場合もありますし、霊という場合もあります。峠の神もそのひとつです。様々な霊があります。そしてその霊の中には死んだ人の霊もあります。そういう霊がこの山の、——全ての山ではありません、形がしっかりしていてどこからでも遠望できる、その社会での象徴的な山ではありますが——、ここへ棲まっているとするわけです。そのカミや霊に対して近くを通るときは挨拶をする。このカミや霊が棲む世界に足を踏み込まないまでも、近くへ行ったときはおそれをなして挨拶をする。これが峠の神を祀った祠ということになります。

もちろんこれは仏教が日本に分布した後はお地蔵さんになったりし、あるいは馬頭観音のようなものも出てきます。様々な形の偶像化というのが出てきますけれども、基本的には山をほぼ三分割して、その頂上部分をカミの世界とし、それでそのカミの世界に近づくことを畏れた人達が、そこで仁義を切って挨拶をして通るということです。そうすると、それは山の樹木が茂っている、その樹木の恩恵を得るために、つまり建築材料を採ったり、木の実を採ったり、きのこを採ったりするために、この山に入るときに、カミの領域に近い山であるからここで挨拶をするということで、山入りを儀礼化したところの祠であったり石像であったりします。あるいは注連縄一本であったりします。

こういう古い形の集落構造というのは、今は見えにくくなっていますが、それでも中国山地、あるいはこの近くでいうと福島県の阿武隈山地、そうしたところを歩くと、私がここで描いたような山と集落の構造が見てとれるところがあります。山頂部に限ることではありませんが、ここに、いろいろなカミや霊が集まっていると日本人は考えました。それは、一つには侵しがたい山の形がある、というだけではなく、山を侵して住まざるを得ないからでもあります。人間が住むところを山麓に確保して、カミや霊の棲む領域を上の方に祀り上げたという考え方も、これは人間の都合からすると成り立つと思います。

そうすると、ここにどういうカミがいるか。どういう霊がいるか。これを漢字で書かないというのは、神道の形成以前から山のカミ、火のカミ、土のカミ、水のカミという言い方があるからです。それから精霊があります。精霊はカミとそれほど変わらないのですが、森の精霊というのがごとくカミに成りえていない、カミまでは昇格していないけれども我々の身近なところにごめいていて、様々な恩恵も与える、そのかわり被害も与える、そういう存在であります。座敷でいたずらをすれば座敷童子、厩で馬にとりついたら馬頭霊ということになります。それから人間以外の死霊というものも精霊のなかに含んでよいでしょう。

とくに、私たちは人の死霊というのは、亡くなってお葬式をすませると極楽へ昇天してしまう、極楽浄土へ旅立つと考えがちです。これは仏教の布教とともに宗派がいろいろ分かれまして、それぞれに独自性を持つことになりまして、南無阿弥陀仏を唱えていれば極楽浄土へ成仏できると唱える宗派も出てきます。日本人の仏教の成立以前までさかのぼれといっても私もできないのですが、

しかし各地方に残っております様々な信仰を見てみますと、最も私たちに身近なところは、死んだ霊が一定の期間山の山頂部にこもるという伝承があります。これは、万葉集で「山隠れ」という言葉で詠んだ歌にも通じます。

山に精霊も死霊も隠れる、アニミズムというのはだから説明しにくい。隠れているのだから、また現れる。それで、私たちは死んだ人の霊を一年後に法事ということで呼び戻します。三年や七年後にも呼び出します。十三年でも呼び出します。これも宗派によって違いますが、三十三年、あるいは三十七年、四十九年、そういう年数を経たそこから、その他大勢のご先祖様になるんです。山へ隠れている間はまだご先祖様の位ではないのです。お寺さんに管理してもらうようになって、山に隠れている間の名前が戒名、法名で、三十三年なり三十七年、四十九年の法事を済ませると、これが弔いあげということはいよいよ極楽浄土へ収まるわけです。戒名とか法名というのを付け、ある期間は時々法事をする、供養をするということを伝えているわけです。

これは仏教行事だと我々は思っていますが、もとは山があつてのアニミズムからの展開であるとするのが妥当でしょう。明治以降、このあたりがあいまいになってきています。それはなぜかというところ、ヨーロッパの宗教、近代国家に接した当時の高官たちが、日本が近代国家を目指すには国の宗教が必要だということで、仏教的なものと神道的なものを殆ど論議することなく、神社神道というものを国の公の行事に使うようになった。したがって反動的に仏教的な要素は私事の行事、葬式、法事、そうした不祝儀を担当するしかなくなったのです。神道と仏教、これを私たちは違う宗教と思っているのですが、もとは両方とも渾然としてありました。アニミズムを許容しているということでは仏教も神道もほぼ同じであります。したがって神仏習合という、これは世界の中では殆ど理解してもらえないような、おかしい信仰形態ができたのです。明治になって神道と仏教が分離したのちも、その後ずっと神道と仏教は習合したままで民間では伝わっていると考えてさしつかえありません。今の若い人たちはもうなじみが薄いかもしれませんが、子供が生まれると大体100日くらいの期間を経たあとお宮さんへ参って初宮という行事をいたします。それから、人が亡くなったからお寺さんに頼んで弔いをする。したがって一つの集落に神社があつてお寺がある。神仏がはっきり分かれているわけではありません。お祭りのときにはお宮さんへ参る、法事ときにはお寺さんに参るということで、同じ人が、同じ家族が、両方を共有している。したがって明治政府は法律上、神道と仏教を別法人として分けましたけれども、私たちの実態はなお、神仏習合になります。それは、アニミズム、とくに神仏ともに山の観念を共有したからだとは私は思っています。

ちなみに、神道だ、仏教だ、キリスト教だ、イスラム教だなどといわないで、全ての死霊は山に隠れている、そういうことがはっきり伝わっている山があります。これは感じてもらうしかないから、一度行ってみてください。伊勢神宮の裏方の山を、朝熊山といいます。今は有料道路のお金が必要になりましたから、車があれば簡単に登れます。朝熊山には天台宗の金剛證寺というお寺があります。江戸時代から日本人は旅を盛んに行ないました。幕藩体制の中でホンネとタテマエをたくみにつかひ分けて盛んに伊勢参りをしました。その伊勢参りをする人達は、伊勢へ参ったら朝熊山にも登った。昔から「伊勢に参らば朝熊を駆けよ、朝熊欠ければ（駆けねば）片参り」といわれ、

伊勢へ参ったら伊勢神宮へ参り、朝熊山にも参るというのは日本人の常識でありました。これが神仏集合であり、神様からおかげをもらう、仏様からおかげをもらう。明治以降は伊勢神宮と朝熊山は別なものと考えようになってしまうましたが、このようなお宮参りお寺参りは、日本人がずっと併行して伝えてきた形です。

それで私は神道も仏教も霊山を共有してきたと言いましたけれども、山の上にそのまま残っているお寺もあるしお宮もある。しかし、平地に降りたお宮もありお寺もある。とくに都市になりますと平地にお宮さんやお寺さんができます。しかし、お寺さんでは山号というのをもっています。たとえば浅草寺というお寺さんがありますが、正式には金龍山浅草寺といって山の名前がかぶります。それからお寺さんには山門があります。石段があって仁王様が入っている門が山門です。ですから、ちゃんと山を伝えております。それから神社へ行きますと、ここには鎮守の森があります。平地にあっても森がある。つまりもともとあった山の信仰を仏教、神道の中に取り入れているのです。ということは、アニミズムを取り入れることが、仏教の布教についても、あるいは神道の布教についても、一番都合がよかったということになります。仏教にも神道にも霊山信仰に代表される古いアニミズムが取り入れられております。

それをご確認いただくのに、もう殆ど忘れられている朝熊山にぜひ登ってみてください。この中で朝熊山に登ったという方は手を挙げてください。お一人いらっしゃいますね。恐ろしい世界だったでしょ？ できれば、あまり晴れていない日がよろしいです。霊と出会うのは晴れた日は出会いにくいんです。霊というのはいろいろなところにいるんですが、それがこの朝熊山ではよくわかる形でもあります。仏教的な塔婆も立っておりますし、神道的な霊柱も立っております。十字架も立っています。石原裕次郎さんの大ファンの肝入りなののでしょうか、裕次郎さんの供養碑も立っております。美空ひばりさんの供養碑も立っていました。

つまり、この朝熊山が見える範囲の伊勢・志摩地方の人達は、人が亡くなるとまず朝熊山に登って、そこで霊、死霊が山隠れるための仮の家を作ります。柱一本ですけれども、仮屋。これは仏教的な梵字が書いてある場合もありますし、神道的な霊位が書いてある場合もあり、いろいろでありまして宗派は問いません。死んだ人がとりあえず三十三年間か三十七年間、山で過ごすための仮屋なのです。それからお葬式を行なうのです。お葬式をして遺骨を収める墓は別ですけれども、霊はここで暫く隠れるという考え方です。両墓制に近いものです。この上に金剛證寺の奥の院がありまして、そこでお金を出して柱を立ててもらう。20万も30万もかけますと10メートルくらいの柱が立つんです。5000円、1万円だと薄い板切れが一枚立ちます。柱がずうっと山の上に並んでいる。日が暮れてくる、雨が降ってきたら、まさに霊が出てきても不思議でない、そういう異界がつくられています。これは、仏教とも神道ともつかない世界です。山上他界というのがとく、もともと山にはこうした信仰が寄せられていたと考えられます。

これが明治以降、どんどんそういう習慣がなくなりました。なくなりまして、別にお寺さんの悪口を言うわけではないのですが、お寺さんは山にまで登って弔うというのは大変なことでありますから、できれば家でやってほしい、できればお寺でやってほしいということになります。信仰の平

地化、もちろん昔からそうあったのですが、明治以降各地で急速に進んだ、ということが言えるでしょう。それからもう一つ残っているのが下北半島の恐山です。ここへ行きますと、イタコというシャーマン、霊媒者が、死んだ人の霊を呼んでくれます。それなりのお金を包んでお願いすると、霊媒者のイタコが祈祷をして、口寄せといいますが、亡くなった霊を呼んで、その思いを自分の口を通して伝えてくれる。マスコミには奇習としてとりあげられますが、昔々は山頂に死霊が宿するという信仰が広く共有されていたとみるべきなのです。幻想の世界ではありますが、また空間の演出的効果が必要なんではありますが、いかにもおばあさんの声、いかにもおじいさんの声というように聞こえるから不思議です。つまり、このアニミズムのいってみればDNAのようなものがまだ私たちの中にかすかにでも残っている、あるいは相当強く残っているともいえるわけです。

もう一つお話しておきましょう。これを総じて「山の神」、といいます。精霊も死霊も全部含めて山の神の所轄。仏教や神道が成立する以前の、あるいは普及する以前の日本では、山の神が唯一絶対とは言いませんが、非常に多機能を有するカミでありました。このカミが必要なときに里に降りてきてくれる、とします。それで役目が終わるとまた山へ帰る。この山の神の循環性というものが日本人のアニミズムの中にできます。田植えのときになると田の神になってくれます。鹿児島県の薩摩半島や石川県の能登半島など、そこには田の神という常在神が祀られておりますが、日本中、多くのところで田の神という専従神はおりません。稲作をこれだけ広めても、田の神というのは山の神が農繁期に、いうなればパートタイムで降りてくる。これをサンバイおろしとかいう言葉で伝えておりましたが、田植え機が普及してからは全くこのことは行事としてはなくなり、見えにくくなりました。ですからかつてあった、ということでご理解をいただきたいと思います。いずれにしても日本人は、田の神は忙しいときに、必要なときに、山の神が降りてきて転じてくれるという観念を強くもっています。

それから正月の神さんもそうです。正月の神さんは一般には歳神さんというのですが、歳徳神といたり、正月神といたりいろいろな言い方をしております。この一年を司る神様も日本では定まった場所にいません。大事な田の神さん、歳神さんというのは、これは仏教や神道の普及以前の問題ですから、山に帰属しているということは道理といえば道理であります。これを言い伝えていたことわざや歌も歌われなくなりました。関東地方の北部、群馬県、埼玉県あたりのわらべ歌に「正月さまござった、どこからござった、山からござった、ゆらゆらゆらとゆずり葉に乗って山からござった」という歌詞があります。ゆずり葉というのは、正月を迎える年末年始あたりに山の中でなお青い。青いというのは生命の象徴と考えられているので、そういう生命力の強い葉っぱに乗って正月さまが降りてくれるという歌です。

中国地方の農山村で広く歌われているのは、「正月来れば歳徳さん、節分過ぎれば田の神さん、八朔過ぎれば山の神」。八朔というのは旧暦の八月一日のことです。そのころになると、もう田に水をあてる必要もなくなるし、台風も大きいのは来るか来ないか大方決まる。ということで、稲の豊作がほぼ保証された、その時期になると田の神は山へ帰るということで、節分過ぎから八朔まで田を守ってくれるわけですが、こういう歌がすっかり歌われなくなりました。けれども、我々世代、

子供のころ、こういう歌はかすかな記憶にしろ聞いていたわけです。つまり、農業の機械化が進むと同時に、こうした日本のアニミズムの感覚がなくなったということです。

話が前後しますが、さきほど北関東ではゆずり葉という常緑樹の葉っぱに乗って歳神さまが降りてくると言いましたけれども、一般的には松の枝に乗って降りてくるというのを形で伝えています。門松というのがそれです。門松は、正月を迎えるときに全国的に立てますが、これは松に乗って歳神さまが降りてきた後処置なのです。ですからその松の枝というのは、歳神さまの依代（よりしろ）。乗り物です。乗り物だから玄関から中へは入れない。玄関先で止まるわけです。それで歳神さまが家に入って、役目を済ませるまで待つ。いつ役目が終わるかという、この頃は七日が一般的ですが、昔はおおむね十五日でした。その間、粗末にはできないからたてておくわけです。これにめでたい松竹梅をつけたりして豪華に飾りますけれども、本来の意味は松の枝一本でよい。アニミズムでは、山を神々の、あるいは様々な精霊の住処として、その山から必要に応じて神々が里に降りてくるといふ信仰観を形成してきたのです。

さて、これまで日本での例を述べましたが、これがどの程度アジアへ広がりをもつか。大変難しいのですが、アジアへこれがどうつながるかを、私もこれからもうちょっと本気でやってみようと思っています。そこで、現在のところ、そういうアニミズムというのは稲作に大いに関係があり、この稲作がアジア的な思想を共有させているのではないかと仮定しています。何でアジア的かといいますと、たとえば死霊、たとえば田の神、これは稲作を前提としないと難しい考え方です。つまり、その土地へ代々住み着かないと、死んだ人、祖先の霊が山に棲むという考え方は成り立ちません。それで必要に応じて里に下ってもらうという考え方も、我々がここへ代々住み着いているから共有できるのです。稲作というのはそこに定住する、これを促す農業の形であります。水田は転々としませんから、そこで代々が居付いて耕作する。となると、代々の祖先の霊が必要に応じて山と里を循環してくれるという考え方が成立するわけです。

田の神は、申すまでもなく稲作の守護神です。これも専従の神さんではなくて、山の神が循環してのパートタイマーだということで、稲作自体にはこのアニミズムの構図が通じるだろうと思うとそう簡単には通じません。そう簡単ではないのです。稲作も二通りあります。一つは水田稲作、それからもう一つは畑での稲作です。陸稲、日本ではオカボと言います。昔々にさかのぼってそこまで確かめることは難しいのでなかなかできませんが、オカボというのは水田が開かれることで水稲に転換しているところが多いのです。しかし、ここで基本的に両方ともに共通するのは、水の必要です。従って降水量が多い東アジアに稲作が広がった、東アジアにしかほとんど広がらなかった。陸稲から水稲への発展系を考えるにも、十分な水が得られる立地が必然となります。川が流れているところに、田んぼを大規模に開き、川から水を引いてくる。これが平地の水田です。それに対して、斜面を利用して中山間の地域に作った水田は、棚田。棚田は基本的には溜め水で耕作します。この棚田を陸稲から水田への途中段階とみることもできるでしょう。平地と山地では、このように流水を引くか溜めた水かという大きな違いがありますが、水を介在させれば、山がまた問題になります。山が水を生むのです。ですから、稲作では山の神を崇めるのも当然ということになります。

もっとも、日本でも平地ではその意識が薄いし、水がかかることのない大河が流れている東南アジアでもその意識が薄いのですが、稲作は水を介しても山を望みながら発達した、としておきたいと思います。

この問題を示唆しておりますのが大林太良という今は亡くなった文化人類学者です。大林先生は『正月が来た道』という本の中で、さまざま指摘されております。大林先生も十分にまだフィールドの確信がもてなくて、示唆をされているだけでありますが、それを詰めていくのは我々、あなたたちの時代の責任だろうと思います。たとえば、大林先生は中国の雲南をとりあげています。雲南にはミャオ族、ペー族、ハニ族、イ族などという少数民族が沢山います。こういう構図の中で部族ごとの違いはありますが、多くは村を拓いて以来の山の神信仰を伝えてきました。山の神が水の神になり、田の神になるということは、私が実際に確かめたのはペ（白）族、大理白族の社会で確かめました。殆ど日本と同じような状況がありました。それからインドシナ半島でもタイ北部のヤオ族、アカ族、リス族といったような山地の焼畑から水田耕作も共有した、そういう人達が山に対する神観念をおおいに発達させています。水は流れてくるものではなくて、山の神が恵むものだということも言い伝えております。ですから、稲作地帯全部に通じるとは簡単に言えませんが、アジアの山岳、陸稲から水稲という歴史を持っているところには明らかに通じるということを、ここでは認めておきたいと思います。

その一番象徴的な、濃密なアニミズムの信仰状態は日本にあります。なぜ日本かというと、まず面積の60数パーセントが未だに山岳山地であるからです。日本の山はその殆どが森林を持っている緑の山。そういう中で山と深く関わってきました。最近では、そのたおやかな緑も、山の整備をしておりませんから、杉が未伐採のままだすし、孟宗竹が我が物顔に面積を広げておりますが。それでもまだ、私たち日本人は山を愛でる思いを伝えているように思います。たとえば、富士山を遠望し思わず手をあわせたいような信仰心に近い気持ちを抱く人は少なくないでしょう。海に囲まれた島国といいながら、この国は山島列島なのです。それに、日本列島は稲作の北限にある、といってもよからうと思います。南方系の稲作を代々苦労を重ねて北へ北へと栽培を広げていった。そこに、アニミズムに加えて祖霊信仰も強く発達をみたのです。こうした文化性を東アジアのなかで位置づけて中国とも韓国とも、もちろん東南アジアの国々とも語りあうことが、とくに若い世代には大事なことになるだろう、と思います。と、期待もしています。

これでひとまず終わります。ありがとうございました。